

長寿医療研究開発費 2024年度 総括研究報告（総合報告）

医療介護の連携や多職種協働を見据えた効果的な研修実施及びわが国の効率的な
対外的窓口のあり方に関する調査研究（22－22）

主任研究者 前島 伸一郎 国立長寿医療研究センター
長寿医療研修センター（センター長）

研究要旨

長寿医療研修センター（以下、「研修センター」）の本務である研修について登録システム構築及び課題の抽出と改善等を進め足下を盤石にする「医療介護の連携や多職種協働を見据えた効果的な研修実施に関する調査研究（以下、「研修の効率化と充実に関する調査研究」）」と、国立長寿医療研究センターにおいて対外的対応の多くを担う研修センターとしての「わが国の効率的な対外的窓口のあり方に関する調査研究（以下、「対外的窓口研究」）」を内外二本の柱として推進している。

<研修の効率化と充実に関する調査研究>

新型コロナウイルス感染症の影響により、研修センターにおいてもオンライン形式が導入されるようになった。しかし、受講者アンケートでは、移動時間削減等の利点を評価する声がある一棒で、「横のつながりができる」や「集中して講義を聴くことができる」といった集合研修の利点を挙げる声もあった。

オンライン研修が広範囲に浸透する中、より効果的な研修のあり方につき改めて検討する時期に来ていると思われる。特に一人の受講生が複数の研修を受講する場合、重複を避ける工夫や過去に受講した研修を踏まえた「スキルアップ」としての研修の提案をしていくことも必要であろう。また、研修センターで実施している研修に参加している多職種の受講生の意見等を集計・分析することで、今後の研修計画に役立てると共に、国や県からの委託だけでなく、独自のフォローアップ研修の実施に向けた検討が可能となると考えられる。

これにより、研修のさらなる充実を図ると共に、国が推進している「医療と介護の連携」や「多職種協働」のさらなる推進に寄与できると考える。

<対外的窓口研究>

対外的窓口の不在に関しては、前身研究において各国の認知症関連組織における対外的窓口の人員及び財務体制の調査とともに、窓口が存在しないことで生じた実際のケース等についても調査を行ったが、新型コロナウイルス感染の世界的な広がりとそのための各国における移動制限をうけ、公開データあるいはメール等による間接的な情報収集に終始せざるを得なかった。

しかし、関係機関が発信する情報のみでは当事者バイアスが排除しきれないため、本研究では現地に赴いての関係者調査、視察等を通じた客観的情報収集と分析も進め、有識者及び関係機関代表を集めての検討や協力体制の構築を通じ、将来的な対外的窓口の構築に資する。

加えて、長寿医療研修センターが当施設を実習病院として受託している大学・専門学校との密接な連携が構築できているかどうかを検証するために、当該機関への情報収集と分析を実施し、次世代の医療・福祉を担う人材育成に必要な体制の構築を目指す。

主任研究者

前島 伸一郎 国立長寿医療研究センター 長寿医療研修センター（センター長）

分担研究者

堀部 賢太郎 国立長寿医療研究センター 長寿医療研修センター（ユニット長）

進藤 由美 国立長寿医療研究センター 企画戦略局（リサーチコーディネーター）

研究期間 2022年 4月 1日 ～ 2025年 3月 31日

A. 研究目的

新型コロナウイルス感染症の影響により、研修の形態は今後さらに多様化すると考えられ、より効果的に研修を実施するための方策について改めて検討する時期に来ていると思われる。特に一人の受講生が複数の研修を受講する場合、重複を避ける工夫や過去に受講した研修を踏まえた「スキルアップ」としての研修の提案をしていくことも必要であろう。また、研修センターで実施あるいは受託している研修に参加している多職種の実習生の傾向や意見等を集計・分析することで、今後の研修計画に役立てると共に、国や県からの委託だけでなく、国立長寿医療研究センター独自のフォローアップ研修や受講者のニーズに沿った研修の企画・検討が可能になると考えられる。

また、わが国の認知症施策は海外からも高い注目を浴びているが、対外的窓口が不在

であることにより、一部に負担が集中したり、偏った情報が海外に伝わる等の不具合が生じている、そこで、前身研究において令和2年から3年にかけて、各国の認知症関連組織における対外的窓口の人員及び財務体制の調査を行うとともに、不十分な対外的対応の結果として実際にわが国にとって不本意な報告書が出たケースに関しても原因と背景の究明を行った。また、認知症の人と家族の会が受託した老人保健健康増進等事業「認知症に関する国際交流プラットフォーム構築のあり方に関する調査研究事業」に参加・協働し、ウェブサイトの公開まで辿り着いている。

しかし、新型コロナウイルス感染の影響で海外での現地調査や国内でも直接的に対人接触を要するものは困難となり、窓口研究に関してはあくまで公表データあるいはメール等による間接的な情報収集に終始している。当初予定していた現地調査は叶わなかった。

関係機関が主体的に開示する情報はどうしても当事者バイアスがかかったものとなり、現地に赴いての関係者調査、視察等、血の通った情報の収集は欠かすことができないため、本研究においてはその実施等により十分な情報収集と分析を進め、有識者及び関係機関代表を交えての検討や協力体制の構築を通じ、将来的な対外的窓口の構築を目指す。

B. 研究方法

<研修の効率化と充実に関する調査研究>

【2022年度】

「受講者登録システム」の構築に向け、当センターで実施している全研修の受講者情報を整理し、システムに入力する情報を検討した。また、専門業者にシステム構築を委託し、初年度は愛知県からの委託研修の受講者情報を入力、整理・分析を行った。

【2023年度】

2022年度ならびに2023年度に愛知県からの委託研修（集合研修＋eラーニング）を受講した者のデータを入力した。登録された822名の情報は、今後CSVデータとして出力、統計ソフト等を活用して受講者の傾向を分析し、学会等に発表するとともに、今後の研修プログラムの検討に役立てていく予定である。また、入力の対象を認知症サポート医や認知症初期集中支援チーム員の受講生に広げ、受講者登録システムの機能の拡張を行うとともに、バグ等を確認し、必要に応じ修正等を行っている。

また、愛知県研修の受講者の傾向を把握し、研修時に実施した受講者アンケート等の意見等と合わせて収集・分析を行い、2024年度の研修内容の検討を行っているところである。

【2024年度】

2023年度に収集したデータを参考に、研修の企画を行うと共に、受講者登録システム

を構築する前の研修受講者のアンケート結果（満足度や意見等）とシステム構築後の研修受講者のアンケート結果の比較を行う。なお、研修によってアンケート項目に違いがある可能性もあることから、集計・分析に当たっては老年学・社会学研究センターの協力を得て実施する。さらに、分析結果を論文化すると共に、国への提言としてまとめる。

さらに、当センターに実習に来ている大学・専門学校生の基礎情報を受講者登録システムに入力し、研修生だけでなく実習生の情報も一元的に管理していく。

<対外的窓口研究>

【2022年度】

ロンドンで開催された国際アルツハイマー病協会国際会議（6月）及びWDC総会（3月）等の場を通じ、対外的窓口の体制と資金調達について情報収集を行っている。バンコクで開催されたASEANのACAI（ASEAN Center of Active Aging and Innovation）会議（8月）に招聘され、アジアにおける高齢者施策関連省庁関係者及び関連組織との情報交換を行った。また、「日本認知症国際交流プラットフォーム」の改善と運営への協力を推進している。

【2023年度】

引き続き対外的窓口の体制と資金調達につき現地調査等を通じた情報収集を行う。また、必要に応じ有識者及び関係機関代表からの取材聴取を重ね、窓口のあるべき姿に関しての検討を行う。

【2024年度】

それまでの調査結果を元に、わが国における持続可能性が高く効率のよい対外的窓口のあり方について検討を行う。その際、諸外国の情報発信力や資金調達力を参考に、①諸外国が求める情報をより効率的かつ効果的に発信するための方策の検討、ならびに、②国内にとどまらず、海外企業等も視野に入れた資金調達（ファンドレイジング）の可能性等についても検討を行い、効果的な国際連携に資する対外的窓口組織の在り方に関する報告をまとめる。

（倫理面への配慮）

研究実施に先立ち、当センター倫理・利益相反委員会の承認を得て実施する。対象者の研究参加・中止の自由を保障するとともに、個人情報の管理を厳重に行う。なお、個人情報を含まない集計された既存統計データや資料を用いる場合には、倫理審査の必要がなく、その資料を用いて解析を行う。

C. 研究結果

研修の効率化と充実：受講者の傾向として、オンライン研修歓迎意見の一方、集合研修の“横のつながり”や“集中度”への高評価が依然顕著であった。複数研修の受講履歴データから、重複プログラムの受講率が約 15%に上り、スキルアップ提案型カリキュラムへの需要が示唆された。アンケートの比較では、システム化の後にはチェック形式の導入により、講師評価や教材視認性に関する具体的フィードバックが倍増した。自由記述分析では、オンライン特有の“疲労感”と集合研修特有の“交流機会”への言及が明瞭に分離された。実習生統合管理として、研修生と実習生合わせて 1,200 名のデータを統合した。実習ニーズ分析では、フォローアップ研修希望者が全体の 30%を占め、独自の研修プログラムの開発が有望と判明した。

対外的窓口体制：現地調査成果として、ASEAN 諸国では CSR 連携や官民共同ファンディングが主流、欧州では大学中心のネットワークが強力。日本との比較で、発信多言語化と資金源多様化の必要性が確証された。ヒアリングの結果、関係機関代表からは“一元窓口の不透明感”と“資金調達ルート乏しさ”が課題として挙げられ、独立法人形態による運営柔軟性向上への期待が高かった。大学連携状況として、実習契約先 50 機関中、定期情報交換を実施しているのは 40%。残り 20%ではフォロー体制が不十分であることが判明した。

D. 考察と結論

本研究は、研修センターの登録システム導入と対外窓口体制調査により、多様化する研修形態と国際発信の効率化課題を明らかにした。研修面では、オンラインと集合研修の利点を統合するハイブリッドモデルが受講者満足度および学習効果を高める可能性が示された。特に、受講履歴を活用したパーソナライズド学習提案は重複受講削減とスキルアップ促進に寄与する。一方、集合型研修の“交流機会”はオンラインでは代替困難であり、定期的な多職種ワークショップが必要かもしれない。対外的窓口研究では、ASEAN の CSR 連携や欧州の大学ネットワークと比較して、日本は多言語発信と資金調達多様化が喫緊の課題と判明した。有識者ヒアリングにより、一元窓口の透明性向上と独立寄付法人形態の導入が高く評価され、強固な運営基盤構築の方向性が示された。大学実習連携では、情報交換実施率 40%に留まり、次世代人材育成のため連携プロトコル整備が急務である。両研究を統合すると、データ駆動型運営と国際ネットワークの両輪でセンター機能を強化できる。今後は提言モデルの実証と評価を通じ、国内外事業との協働を深化させることで、持続可能かつ高付加価値な研修・発信基盤の確立を目指すべきかもしれない

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

2022 年度

- 1) Yoshitake M, Maeshima E, Maeshima S, Osawa A, Ito N, Ueda I, Kamiya M. Olfactory identification ability in patients with mild cognitive impairment and Alzheimer's disease. *J Phys Ther Sci* 2022;34:710-714.
- 2) Yoshitake M, Maeshima E, Maeshima S, Sasaki K, Osawa A. Association between cognitive function and olfactory identification ability in community-dwelling older individuals. *J Phys Ther Sci* 2022;34:459-462.
- 3) 山路千明, 前島伸一郎, 永井 将太, 渡邊 誠, 稲本 陽子, 園田 茂. 回復期リハビリテーション病棟における左被殻出血の血腫型による失語症重症度の特徴. *脳卒中* 2022;44(1):6-11.
- 4) 神谷正樹, 大沢愛子, 村田璃聖, 植田郁恵, 前島伸一郎, 櫻井孝, 近藤和泉. 軽度認知障害と認知症の介護負担感の1年の経過と変化の要因に関する探索的検討. *Dementia Japan* 2022;36:142-151.
- 5) 前島伸一郎, 大沢愛子. 臨床神経心理士: 学会認定資格取得のお勧めーリハビリテーション科医の立場から. *高次脳機能研究* 2022;42:35-39.
- 6) 太田久晶, 前島伸一郎. さまざまな注意のかたち. *神経心理学* 2022;38:172-174.
- 7) 山路千明, 前島伸一郎, 永井 将太, 渡邊 誠, 稲本 陽子, 園田 茂. 回復期における左被殻出血患者の失語症の改善に与える要因. *脳卒中* 2022;44(6):607-614.
- 8) 前島伸一郎, 神里千瑛, 大沢愛子. 高齢者の認知機能障害に対するリハビリテーション. *Geriatric Med (老年医学)* 2022;60:991-996.
- 9) 大沢愛子, 前島伸一郎, 荒井秀典. CGA 以外の ADL 評価法とその問題. *Geriatric Med (老年医学)* 2022;60:419-23.
- 10) Kawamura K, Maeshima S, Osawa A, Arai H. Overarching goal and intervention for healthy aging in older people during and after the COVID-19 pandemic: Impact of rehabilitation. *Palermo S, Olivier B, eds., In: COVID-19 pandemic, mental health and neuroscience- New scenarios for understanding and treatment. IntechOpen, UK, <https://www.intechopen.com/online-first/83337>*
- 11) Osawa A, Maeshima S, Arai H. Applying Information and Communication Technology to Promote Healthy Aging in Older People: Japan's Challenges and Perspective. *Digital Health*; ISBN: 978-0-6453320-1-8. Exon

Publications, Brisbane, Australia. 2022

- 12) 前島伸一郎, 大沢愛子. 高次脳機能障害への対応. 日本臨床 (増刊号) 最新臨床脳卒中学 (第2版), 2022, pp632-636

2023 年度

- 1) Kamizato C, Osawa A, Maeshima S, Kagaya H, Arai H. Activity level by clinical severity and sex differences in patients with Alzheimer disease and mild cognitive impairment. *Psychogeriatrics*. 2023; 23:815-820.
- 2) Maeda T, Okawara M, Osakabe M, Yamaguchi H, Maeda T, Maeshima S. A case of catalepsy after multiple cerebral infarction. *Neurol Clin Neurosci* 2023; 11:248-250.
- 3) Yoshimura T, Osaka M, Osawa A, Maeshima S. The classical backward digit span task detects changes in working memory but is unsuitable for classifying the severity of dementia. *Applied Neuropsychology: Adult* 2023; 30:528-534.
- 4) Maeshima S, Osawa A, Kawamura K, Yoshimura T, Otaka E, Sato Y, Ueda I, Itoh N, Kondo I, Arai H: Neuropsychological tests used for dementia assessment in Japan: Current status. *Geriatr Gerontol Int*. 2024;24 Suppl 1:102-109.
- 5) 前島伸一郎, 大沢愛子. リハビリテーション update IV リハビリテーションが必要となる疾患 認知症・軽度認知障害. 日本医師会雑誌 152 (特別号) :151-154, 2023
- 6) 前島伸一郎, 大沢愛子, 半井慎太郎, 神里千瑛, 伊藤直樹, 荒井秀典. もの忘れに対する Mini-Cog©日本版の有用性: 認知症・軽度認知障害のスクリーニング検査としての意義. *Dementia Japan* 2024;38:148-155.
- 7) 前島伸一郎. 長寿医療研修における役割と展望. 医療の広場 2024;64(2):4-9.
- 8) 前島伸一郎, 半井慎太郎, 大沢愛子. 失語症. 臨床リハ 2024;33(3):212-217.
- 9) 前島伸一郎. 脳血管障害による高次脳機能障害. 理学療法京都 2024; :58-62.

2024 年度

- 1) Masuda Y, Kamiya M, Ueda I, Yoshimura T, Osawa A, Maeshima S. Aphasia in Alzheimer's disease: Frequency and characteristics. *Geriatr Gerontol Int*. 2024;24:1380-1381.
- 2) Kawamura K, Wakayama S, Osawa A, Ishino S, Iwase T, Tanimoto M, Itoh N, Maeshima S. Effectiveness of Home Exercise Program for Older People approach for frailty: A preliminary study. *Geriatr Gerontol Int*. 2024;24:649-651
- 3) 前島伸一郎. 長寿医療研修における役割と展望. 医療の広場 2024;64:4-9.

- 4) 前島伸一郎, 半井慎太郎, 大沢愛子. 失語症. 臨床リハ 2024;33:212-217.
- 5) 前島伸一郎. 脳血管障害による高次脳機能障害. 理学療法京都 2024; :58-62.
- 6) 前島伸一郎. 神経心理学をリハビリテーション医療に活かす. 神経心理学 2024;40:31-38.
- 7) 前島伸一郎, 大沢愛子, 半井慎太郎, 神里千瑛, 伊藤直樹, 荒井秀典. もの忘れに対する Mini-Cog©日本版の有用性: 認知症・軽度認知障害のスクリーニング検査としての意義. Dementia Japan 2024;38:148-155.
- 8) 大沢愛子, 前島伸一郎. 外傷性脳損傷の診断と対応. 神経心理学 2024;40:283-290.
- 9) Maeshima S, Osawa A, Kawamura K, Yoshimura T, Otaka E, Sato Y, Ueda I, Itoh N, Kondo I, Arai H: Neuropsychological tests used for dementia assessment in Japan: Current status. Geriatr Gerontol Int. 2024 Mar;24 Suppl 1:102-109.

2. 学会発表

2022 年度

- 1) 前島伸一郎, 大沢愛子, 川村皓生, 吉村貴子, 大高恵莉, 佐藤弥生, 植田郁恵, 伊藤直樹, 近藤和泉, 荒井秀典: 本邦における認知症診療における神経心理学的評価の実態. 第 41 回日本認知症学会学術集会 (シンポジウム). 東京, 2022
- 2) 大沢愛子, 前島伸一郎, 植田郁恵, 神谷正樹, 伊藤直樹, 神里千瑛, 近藤和泉: 認知症診療における専門性〜リハビリテーション専門医の立場から. 第 41 回日本認知症学会学術集会 (シンポジウム). 東京, 2022
- 3) 大沢愛子, 前島伸一郎, 植田郁恵, 神谷正樹, 伊藤直樹, 神里千瑛, 近藤和泉: 私の推奨する認知症リハビリテーション. 第 41 回日本認知症学会学術集会 (シンポジウム). 東京, 2022
- 4) 前島伸一郎. 言語回復のメカニズム. 第 46 回日本高次脳機能障害学会学術総会サテライトセミナー. 山形, 2022

2023 年度

- 1) 前島伸一郎. 高次脳機能障害の評価と治療. 第 26 回日本臨床脳神経外科学会, 宇都宮, 2023. 7.14
- 2) 前島伸一郎. 健康寿命を延ばすための運動とフレイル予防. 大阪体育大学公開講座, 大阪. 2023. 9.2
- 3) 前島伸一郎. 神経心理学を活かしたリハビリテーション医療. 第 48 回日本神経心理学会学術総会, 高知, 2023. 9.7.
- 4) 前島伸一郎, 大沢愛子. 認知症に対するリハビリテーションの概要. 第 7 回日本

リハビリテーション医学会秋季学術総会. 宮崎, 2023.11.4.

- 5) Maeshima S, Osawa A, Nakarai S, Kamizato C, Itoh N, Arai H. Assessing the Utility of Mini-Cog[®] for Dementia and Cognitive Function Screening in Japan: Study Results. AD/PD2024 International Conference on Alzheimer's and Parkinson's Diseases and related neurological disorders. 2024. 3.5-9. Lisbon
- 6) Osawa A, Maeshima S, Yoshimura T. Opinions of MCI/Dementia patients and their family caregivers about undergoing detailed evaluation. AD/PD2024 International Conference on Alzheimer's and Parkinson's Diseases and related neurological disorders. 2024. 3.5-9. Lisbon
- 7) Nakarai S, Osawa A, Kagaya H, Maeshima S. Examining the usefulness of fox and reverse fox hand imitation in dementia treatment. AD/PD2024 International Conference on Alzheimer's and Parkinson's Diseases and related neurological disorders. 2024. 3.5-9. Lisbon
- 8) Shindo Y, Horibe K, Maeshima S. Placement of Regional Facilitators of Dementia Policies and their Participation in E-Learning Courses. Alzheimer's Disease International. 2023.10.27-29. Brunei

2024 年度

- 1) Osawa A, Maeshima S, Yoshimura T. Investigation of stigma against individuals with dementia. 18th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation (ISPRM) 2024, Sydney, Australia, June 1-6, 2024
- 2) Maeshima S, Osawa A, Yoshimura T. A study of electronic device use and quality of life in patients with MCI and dementia and their caregivers. 18th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation (ISPRM) 2024, Sydney, Australia, June 1-6, 2024
- 3) Yoshimura T, Osawa A, Takei M, Maeshima S. How does working memory capacity affect prospective memory in dementia? 18th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation (ISPRM) 2024, Sydney, Australia, June 1-6, 2024
- 4) Maeshima E, Maeshima S. Cognitive function and factors influencing cognitive function in rheumatoid arthritis. 26th Asia-Pacific league of associations for Rheumatology Congress, Singapore, Aug 21-25, 2024
- 5) 半井慎太郎, 大沢愛子, 加賀谷齊, 前島伸一郎. 手指模倣評価による認知機能低下の鑑別. 第8回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会, 岡山市, 2024.11.1-3.
- 6) 伊藤直樹, 大沢愛子, 相本啓太, 上野貴之, 前島伸一郎. 認知症と転倒リスク～身

体・運動機能の評価とリハビリテーションの重要性．第 48 回日本高次脳機能学会
学術総会（シンポジウム）, 東京, 2024. 11. 8-9.

G. 知的財産権の出願・登録状況
なし